尾州産地物語

―親が子に語り継ぐ―

麻沙桧枯

子　父さん、尾州産地は毛織物の生産地でしょう。販売はどうなっているの。

父　他の産地と異なるのは機屋が生産機能と共に販売機能を持っている点だね。他産地のような下請けを使って生産するという産元問屋は大きく成長しなかった。しかし、生地の販売業者は一宮駅前を中心に多かったよ。

１６、卸商社の変遷

昭和４８年（１９７３年)、まだ雑木林が残る一宮市丹陽地内に、白亜の殿堂を寄せ合った繊維卸団地が完成した。この地は名神高速道路一宮インターに隣接する交通の要所で、駅前に集中していた生地卸、糸卸、二次製品卸など１１２社が、協同組合一宮繊維卸センターを結成して、移転したのである。

尾州産地における卸商は江戸時代後半から栄えた綿織物の発展と共に、成長してきた。力のある綿織物業者は自力で販売できたが、販路を持たない業者は問屋に頼んで全国に販売したのである。これらの業者は仲買人（なかがいにん）と呼ばれた。『一宮の歴史』によると仲買人のほか「持下（もちさがり）がり屋」と呼ばれる織物商人もいた。仲買人や持下がり屋は終日、機屋から機屋を回り、買い付けては三八市での販売や名古屋などの集散地問屋に卸した。

尾西織物同業組合の昭和１５年編纂の『尾西織物史』によると、仲買人は「風呂敷一筋が資本で機屋の製品を数種借り受け、向きそうな問屋へ売り込む」人々、持下がり屋は「機屋から現金で仕入れ、これを全国に売りさばく」人々、買い継ぎ問屋は「明治維新前後からできた」としている。

『モリリン百年史』は明治７年（１８７４年）の卸商の活動を次のように述べている。「明治７年に５代目林右衛門と弟の林兵衛が辰己屋（モリリンの前身）を切り盛りしていくことになった（中略)。二人は近隣で作られる桟留縞や寛大寺縞、佐織縞といった特産の手織り縞を買い求めて他県に卸売りする、いわゆる“縞屋”の仕事にも手を広げていった。ただ、地方への卸売りといっても、鉄道が登場するのはまだ先のことであり、徒歩による商売行脚であった」

「最初の頃の販路は伊勢、美濃、信州などであったが、得意先が多い伊勢方面に出かける時には、前夜のうちに荷物を起村（現・一宮市起）まで運んでおき、そこから木曽川を舟で桑名まで下った」

辰己屋の兄弟は桑名の定宿（じょうやど）に入って荷物を解き、その足で得意先に知らせに回り、宿で得意先と商談したのである。

ところで、持下がり屋は「機屋から現金で仕入れ、全国に出張販売した」（『一宮の歴史』）点に特徴があり、やがて販売先は名古屋から大阪、北陸へと拡大していき、機屋と集散地問屋を結ぶ買継ぎ商として成長していった。当時の尾州産地の販売先について『豊島その歴史』は「明治１８年、つまり３代目半七が家業を継いだ年の「一宮村市街商高表」によれば、販路は名古屋、伊勢、三河、遠江、駿河、東京、京阪、その他西国」と記している。ちなみに一宮が町になったのは明

治２２年である。国鉄（現・ＪＲ）東海道尾張一宮駅が開通したのは明治１９年（１８８６年）で、それまでは荷馬車や川船に頼るしか輸送手段は無かったので、大変な苦労であった。

明治に入って、卸商の中にも変化が現れてきた。それまでは「織物を買って販売する」という単純な中継ぎ業務専門だった買継ぎ商の中に、機屋に糸を提供して指定の色柄の織物を賃織りさせる動きが出てきた。糸を与えて自主企画の商品を製造販売する業態である。その糸の販売は誰が担ったのだろうか。

綿の仲買から出発した豊島が糸の商いを始めたのは「幕末期、安政から文久にかけての間と推定される」（『豊島その歩み』）が、その後伸びたのは「洋糸」といわれた輸入糸の扱いだった。「国産糸を次第に押し退けて、機業地へ浸透していく洋糸は、当時として“未来に満ちた有望商品”であり、これを扱う綿屋半七（豊島の前身）の店の、隆盛の一原動力であったのは確かである」（同）。綿屋半七は唐糸と呼ばれた洋糸をイギリスのランカシャーから仕入れていた。

また明治初期、辰己屋（モリリンの前身）は「手紡ぎの地糸や輸入綿糸に加えて、近代的紡績工場で生産された綿糸の取り扱いをはじめた」（『モリリン百年史』）とあり、糸の販売をこの頃から始めたのであろう。辰己屋は縞（生地）の販売と共に糸の販売も行っていたのである。

綿屋半七や辰己屋という糸の仕入先が同じ産地内にあったことが、尾州にどれだけ利益をもたらしたことか、いうまでもない。もちろんこの２社だけが、糸の供給先ではないが、「持ってきて」といえば、数時間、いや数分後に糸が手に入る利便は尾州の強みである。

大正時代に尾州で毛織物が本格化すると、今度は毛糸や毛織物を専門に扱う卸商が誕生した。それらの業者は明治３８年（１９０５年）に結成されていた「尾西織物同業組合」に加入したが、その数は昭和元年には１５２社にのぼった。この組合は機屋、染色整理、仲買人、買い継ぎ問屋など織物関係者をすべて網羅（もうら）するものであった。

これらの卸商関係者の多くは尾張駅前に集中しており、仕入れ先の機屋に近く、駅前ということで、お客も来やすい立地だった。特定の販路を持たない前売りと呼ばれる業者には格好の場所だった。

しかし、その後、新幹線や名神・東名高速道路の開通により、利点であった至便な交通立地というメリットが薄れた。車社会の到来で、狭い地域での密集ということも逆にデメリットになってきた。これを打開するため、駅前の卸商は、始め新幹線羽島駅近くへの集団移転を計画したが、希望する土地が確保できず、名神高速一宮インターチェンジ近くの丹陽地内へのニュータウン建設を決めた。一宮市の協力を仰いで、昭和４８年（１９７３年）１１２社が団地に移転した。繊維卸だけの商業団地は日本でここだけである。

「繊維卸センターと服織神社」

真清田神社前の三八市に源流を発した尾州産地の卸商は尾張一宮駅前での賑わいを経て、高度高速化社会にあわせて丹陽地区に集積した。繊維卸センター組合の隣接地には真清田神社前の三八市の面影を残すように織物の神さま、服織神社が鎮座している。